

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	横塚 彩
論文題目	ボノボに対する摂食タブーの変遷 ーコンゴ民主共和国ボンガンドの事例からー		
(論文内容の要旨)			
<p>ボノボ (<i>Pan paniscus</i>) はコンゴ民主共和国 (DRC) にのみ生息する大型類人猿であり、近年の狩猟圧の高まりによって絶滅危惧種に指定されている。申請者の調査地であるDRC中部に居住する焼畑農耕民ボンガンドは、伝統的にボノボを食物禁忌の対象としてきたが、このことが要因の一つとなって、この地域でボノボの研究・保護活動がおこなわれるようになった。本論文は、ボンガンドのボノボに関する口頭伝承と食物禁忌の変遷を記述した後、動物保護区の内外でボノボの狩猟および摂食状況を分析することによって、将来にわたるボノボの保全について考察したものである。</p> <p>第1章ではまず、アフリカ大型類人猿の野外研究と保全の歴史について述べた後、ボノボの生息地、生態、保全について概観している。次いで、近年のボノボ減少の主要な原因のひとつである1990年代から2000年代にかけてのコンゴ戦争を中心としたコンゴの歴史を概観し、調査対象である焼畑農耕民ボンガンドの社会と生態、および申請者による調査の概況について述べた。</p> <p>第2章では、ボンガンドに伝わる口頭伝承「イカノ」を分析した。イカノには「人間とボノボは兄弟であり、互いに助け合ったり結婚したりする」といった話が多く見られ、このことがボノボの摂食タブーの要因であるとされてきた。一方で、ボノボがインゴロンゴロやイクンジュキといった森に住む妖怪のような存在と重なって語られる場合もあり、ボノボのイメージは両義的である。近年ではボノボに関する伝承の認知率は低下しており、このこととボノボ肉摂食の増加は関連していることが示唆される。</p> <p>第3章では、ボノボの摂食タブーを含む、ボンガンドの食物禁忌の歴史的変容を分析している。1970年代に近隣の地域で調査をおこなった武田のデータと、2016年に申請者が行なった調査データを比較した結果、この40年間で多くの種に対する食物禁忌が薄れてきており、ボノボに対するタブーもその例外ではないことが明らかになった。また、ボノボを食べて起こるとされる「悪い出来事」について言及されることは少なく、摂食回避にはむしろ、官憲の取り締まりや、ボノボ調査活動の存在が強く影響していることが示唆された。</p> <p>第4章では、広域にわたる聞き取り調査による、保護区内外でのボノボの狩猟方法や販売実態が記述されている。保護区内やその近隣においては、長年にわたるボノボ調査が摂食タブーという在来知を強化した結果、ボノボ保護の意識が浸透しており、摂</p>			

食経験を持つ人は未だ少なかった。一方、保護区外でのボノボの摂食は保護区内よりも多く、ボノボへのタブーを保持する老年世代と積極的に摂食する若者とが二極化する傾向があった。若者世代がボノボ肉を受容する要因としては、都市部への出稼ぎの増加や銃の流通が考えられる。また狩猟者が肉の一部を村の権力者に贈与するという在来慣習を適用することによって、警察による逮捕を免れて肉を販売しているという実態が見られた。

第5章ではまとめとして、ボンガンドのボノボ観に関する考察と、ボノボの保全政策の可能性についての議論をおこなった。動物保全に関する過去の事例が示すように、密猟の取り締まりを強化することで保全がうまくいくわけではなく、現在は住民参加型保全（community-based conservation）が重視されてきている。調査地近辺でもそのような試みが成功している例があるが、その鍵となっているのが、すでに効力を失いかけているかに見える、ボノボに関するタブーである。ボノボの狩猟を避けてきたワンバ村の住民がその理由として口を揃えてあげるのは「人間との類似性」であり、こういったボノボに対する「距離感」に学ぶことが、ボノボの狩猟に歯止めをかけることにつながると考えられる。このように伝統文化を現代的文脈に位置づけ、ボノボ研究や保全教育と関連させつつその価値を再創造することが、これからのボノボの保護に必要なだと結論される。